

【小笠原論文へのコメント】

書きにつまずきのある児童の作文に関する検討

—— 小笠原論文へのコメント ——

奥村 智人

作文には、文字の形の正確さや表記など基礎的な書字技能から、漢字や熟語の使い方、文法、文章の構成能力や表現力などといったより高度な書字技能まで幅広い書字に関するスキルが必要である。このことから、教育の中でも重要な学習として位置づけられている。

センター試験に代わり、2020年度から開始される「大学入学共通テスト(仮称)」では、「知識・技能」だけでなく「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するという方針が示されている。具体的には、国語と数学では記述式試験の導入が予定され、国語科における作文指導の重要性は、ますます高まっていると言える。

小笠原論文は、この作文を書きのアセスメントとして活用し、明確な評価項目に基づいて書きにつまずきのある児童の特性を捉え、支援法を検討することを試みた貴重な研究である。日本語における先行研究は少ないが、海外の研究では学習障害(Koutsoftas, 2016)やADHDおよびASD(Zajic, McIntyre & Swain-Lerro et.al., 2016)において作文のテーマ設定や文章構成に課題があり、学習の困難さと関連があることが指摘されている。今後、日本語の発達障害においても研究が必要な領域であり、作文アセスメントの実践も期待される。

論文において、通常学級児童と書字に困難さがある児童では作文量に有意な差がみられ、書字に困難さがある児童のほうが作文量は少なかった。

さらに、詳細な誤り分析が構造的に行われ、書字に困難さがある児童の特性について検討が行われたことは今後の研究の参考になると思われる。

論文でも考察されているとおり、作文量の少なさや作文中の書き誤りの要因は様々である。学習障害やASD、ADHDでは作文量や誤りの傾向、その要因は異なると考えられる。特性に合わせた支援法を考える上でも、これらの発達特性や読み書きの状態による作文アセスメントの傾向について検討を行うことが今後の課題であると思われる。さらには研究が進み、日本の教育現場で臨床応用されることを期待する。

【文献】

1. Koutsoftas AD (2016): Writing Process Products in Intermediate-Grade Children With and Without Language-Based Learning Disabilities. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 59(6), 1471-1483.
2. Zajic MC, McIntyre N, Swain-Lerro L, et.al. (2016): Attention and written expression in school-age, high-functioning children with autism spectrum disorders. *Autism*. [Epub ahead of print]